

## 5. 独居癌患者の在宅ホスピスケア

萬田 緑平 (緩和ケア診療所 いっぱ)

「緩和ケア診療所 いっぱ」は在宅支援診療所として、癌患者の在宅ホスピスケアを中心に再出発して2年4ヶ月。在宅癌患者は270人、在宅看取り率は95%となる。

独居の方は一般の方より在宅で過ごしたいという気持ちが強く、在宅ケアを希望する方は想像以上に多い。もちろん在宅ホスピスケアでは独居の方のケアは介護の手段に限られているから困難症例だといわれている。一方、在宅ホスピスケアでは独居の方がケアしやすい面もある。家族の満足を考える必要がないからだ。意志の強い本人さえ満足していればいいのだから。患者さんがどんなに不便そうだろうが、寂しそうだろうが本人がその生活がいやならやめればいい。心地良ければ続ければいいのだと思う。独居と言っても、天涯孤独型独居(身寄りなし)から、孤高希望型独居(子供と同居拒むタイプ)、そして家族支援型独居(家族が通う独居)、家族内独居(事実上独居)、その他いろいろな形態がある。何で一人暮らしを続けたいのか。寂しくないのか。孤独死を望んでいるのか? 独居とは何だろう。そしてどうやって独居を支援するか。今回25例の独居(ほぼ独居)症例(約1割)をタイプ別に分類し、その転機を分析、症例を交えて報告します。

## 6. 悪性リンパ腫長期入院患者への在宅へ向けた関わり

中沢まゆみ, 飯塚さち子, 松田 智恵

楠 恵, 黒澤 亜弥, 羽鳥裕美子

椎名美智子, 徳淵真由美

(独立行政法人 国立病院機構

高崎総合医療センター 緩和ケアチーム)

【はじめに】入院が長期化した患者に多職種が関わることで、在宅療養へ移行出来た1例について紹介する。

【事例紹介】対象: 70歳女性 A氏 悪性リンパ腫 1人暮らし経過: 2008年8月~11月の間に入院を繰り返す。化学療法を行った。その後脊髄転移が出現し、照射及び化学療法実施の為再入院となった。治療は奏功したが、下半身麻痺が残った。【看護展開】2008年11月の再入院より、主治医と病棟看護師が症状緩和を行っていたが、疼痛コントロールが図れずに緩和ケアチームへ依頼した。症状のコントロールを図ることができ、B病院へ転院した。1か月後、当院へ再入院となる。退院支援看護師が介入し、在宅療養には消極的であった家族と面接を繰り返す。本人が帰りたいという思いを理解してもらった。その結果、家族の気持ちに変化がみられた。本人は、下半身麻痺となり在宅療養は一人ではできないと思っていたが、「残存機能を訓練し生かすことでQOLの向上を図ることができる」という認識と、「リハビ

リをすれば帰れる」という前向きな発言が聞かれた。その後、試験外泊を2回行い、1年6ヶ月の入院生活を終えて在宅療養へと移行することができた。【考察】多職種が関わることで、1人暮らしという不安な環境でも安心して帰れるという自信をつけることができた。その中で緩和ケアチームは、本人の心の迷いや今後どのような毎日を送りたいのかという思いに寄り添うことができたと考えられる。【まとめ】本人と家族が安心して在宅療養を迎えるためには、多職種が連携し関わっていくことが重要である。

## 7. 「よかった」と思える死

加藤恵理子

(群馬大医・附属病院・臨床研修センター)

(緩和ケア診療所 いっぱ)

【はじめに】「よかった」と思える死がある。研修医として在宅での看取りに立ち会い、はじめて知った。家で看取った家族は、「本人の願いを叶えられてよかった」と、涙しながら笑顔を見せてくれる。家族には喪失感だけでなく、満足感が残っている。それだけでなく、私たちスタッフの心にまで「よかった」という思いが湧いてくる。私にとって、関わられて幸せだったと感じた何人かの患者さんの中の一例を紹介する。【事例紹介】52歳女性、直腸癌肝転移で入院中だったが、中3と小6の子供たちと過ごすため、X-12日、在宅療養を開始した。予後は短く、子供たちにどう伝えるか悩んでいた。医師が「両親から真実を伝えることが理想的だが」と助言すると、二人はその夜に家族会議を開いた。子供に「お母さん死んじゃうんだよ。」とありのままを伝えた。子供たちは最後まで話を聞いて、家族4人で団結式をした。そして久しぶりに皆で一緒に寝た。翌日から子供たちは普段通り学校に通い、母と自然に接しながら看病をした。X-2日、苦痛のためモルヒネ座薬の頻回頓用が必要となり、X-1日、塩酸モルヒネ持続皮下投与を開始した。子供たちと別れの挨拶をした後にモルヒネ流量を漸増した。X日早朝、子供たちを呼び、「二人がお母さんの子供で、お母さんは本当に嬉しい。ありがとう。」と言い、子供たちも「ありがとう」と返した。その後入眠し、家族に見守られて亡くなった。2週間後の訪問時、夫は「家に帰るという本人の希望を叶えることができて本当によかった」と振り返る。子供たちは「お母さんに心配を掛けたくない」と、元気に、部活に精を出していた。【考察】事例では、家で子供たちと過ごし、愛情を伝えるという本人の願いを実現し、家族の団結力が強まった。毎日「いってらっしゃい」と子供に言うことは、入院中では難しい。しかし、病院においても、本人の希望するいき方を応援するために何ができるかを常に意識していきたい。